

解説：瞬発力をみる。

項目 3. 立った姿勢から、体を前に曲げて、両手の指先きを床につけることができる。

(+, -)

解説：柔軟性をみる。

項目 4. ドッチボールを両手で持ち、股間から前方へ 6 m 以上投げることができる。

(+, -)

解説：物体の制御性をみる。

項目 5. 鉛筆で 10 秒間に 50 回以上、紙に点をうつことができる。(+, -)

解説：小筋群の敏捷性をみる。

項目 6. あお向きに寝た姿勢から、おき上がりが機敏にできる。2 秒以内。(+, -)

解説：敏捷性をみる。

項目 7. 片足をあげ、眼を閉じたままで 15 秒間立つことができる。(+, -)

解説：静的平衡性をみる。

項目 8. 3 m の長さのマットの上を、8 秒以内に横転しながら移動できる。(+, -)

解説：身体の制御性をみる。

4. 小児の精神身体発育からみた初期環境における Separation Deprivation の影響に関する研究

研究協力者 網野 武博 (日本総合愛育研究所)

萩原 英敏 (同上)

金子 保 (淑徳大学)

1. はじめに

乳幼児の発達環境が、その後の精神身体発育にさまざまな影響を及ぼすとの指摘がある。とくに乳幼児期の分離 (Separation) 及び喪失 (Deprivation) の経験を無視することはできない。これについては、前年度において欧米の文献を中心に検討し、論考したところである。本研究は、その文献研究に引き続き計画された実証的研究の一部である。

2. 研究方法

K県の私立D乳児院（昭和44年開設）において開設以来在籍していた乳幼児255名（男児160名，女児95名）を対象としてSeparation，Deprivation及び乳児院における経過を把握するため，つぎの内容についてカルテ調査を行い，検討を加えた。

- a. 入院時の年・月及び月齢
- b. 措置理由
- c. 父母の学歴
- d. 入院時の母の年齢
- e. 退院理由
- f. 退院時の年・月及び在院期間
- g. 入院時，3・6・9・12・24各カ月及び退院時の体重値
- h. 退院時における発達状況

3. 研究結果と考察

(1) 入院児の状況

- ① 11年間の入院児の入院時月齢は，12～23[㊦]カ月児が111例（43.5%）と最も多く，6～11カ月児が68例（26.7%），1～5カ月児が66例（25.9%），24カ月以上児が8例（3.1%）となっている。年度推移からみると，近年低月齢乳児の入院が増加傾向にある。
- ② 11年間の退院児238名の在院期間は0～5カ月が146例（61.3%）と過半を占め，12～23カ月が51例（21.4%），6～11カ月が39例（16.4%）の順となっており，近年は比較的短期間の傾向にある。
- ③ 措置理由別では，毎年最も多いのが実母の疾病（41.6%）である。疾病の内容では，精神病，ノイローゼがその1/4を占めている。次いで実母の家出（17.2%），離婚・別居（10.2%）の順となっている。両親のいない乳幼児は8.6%ときわめて少ない。
- ④ 父母の学歴は，高卒以上が父親の31.8%，母親の29.7%であり，年度推移とともにやゝ高学歴の傾向がみられる。
- ⑤ 入院時の母親の年齢は30歳以上が48.4%と最も多い。

㊦ 23カ月は24カ月未満を示す。以下同じ。

- ⑥ 退院理由別では、家庭引取りが65.5%と最も多く、措置理由の傾向とあわせて考えると、ある期間乳幼児を家庭から預り養育している例が多いことがわかる。次いで養護施設への措置変更が27.3%であるが、2歳まで乳児院で養育している例が非常に多い。
- ⑦ 身長・体重の月齢別、年度別推移は厚生省の標準値（昭和45年調査）とほぼ一致しているが、近年は歳未満児についてはやや低く、1歳以上児についてはやや高い。乳児院における養育の効果を検討するひとつの資料と考えられる。

(2) 退院時における発達状況

発達成績については、昭和47年度より主として津守・稲毛式発達検査をもとにした乳児発達記録表に毎月1回全児についてチェックしている。今回の調査では、255名のうち、記載不十分、記載漏れ、障害の明らかな乳幼児を除く123名（男児81名、女児42名）について、退院時の発達状況を統計的に検討し、考察を加えた。

- ① 入院時の月齢及び在院期間は、第1図及び第2図のとおりであり、月齢の平均は12.2カ月、在院期間の平均は7.6カ月である。
- ② DQ値は[㊦]、第1表のとおり、平均は102（最低41～最高150）であり、男児（平均102）と女児（平均101）の間には有意差はなかった。
- ③ 領域別にDQ値を比較すると、第3図のプロフィールで明らかなように、運動機能が114と最も高く、探索・操作（106）、社会性・情諸（103）が標準を越え、生活習慣（96）と言語・理解（90）が標準より低く、これらの間には有意差がみられた。これをさらに検討するため、年度別、入院月齢別、在院期間別に考察した。
- ④ DQ値の年度別推移は第2表のとおりであり、言語・理解領域についてはやや上昇傾向がみられたが、有意差は認められなかった。
- ⑤ DQ値を入院月齢別にみると第3表のとおり、0～5カ月児及び18カ月以上児に比較し、6～17カ月児のDQ値が高く、有意差が認められた。さらにこれを領域別にみると、第4表のとおり平均DQ値の低い0～5カ月児では領域別に差はないが、18カ月以上児では言語・理解・社会性・情諸といった人間関係を背景とする領域がとくに低く、平均DQ値の高い6～17カ月児では、言語・理解を除く領域の発達が良好であることがわかる。以上のことから、出生後間もなくのdeprivation及び1歳以上のそれまでの家庭などに

㊦ DQ値は発達検査結果を指数であらわし、歴月齢と発達月齢とが等し時を100としている。

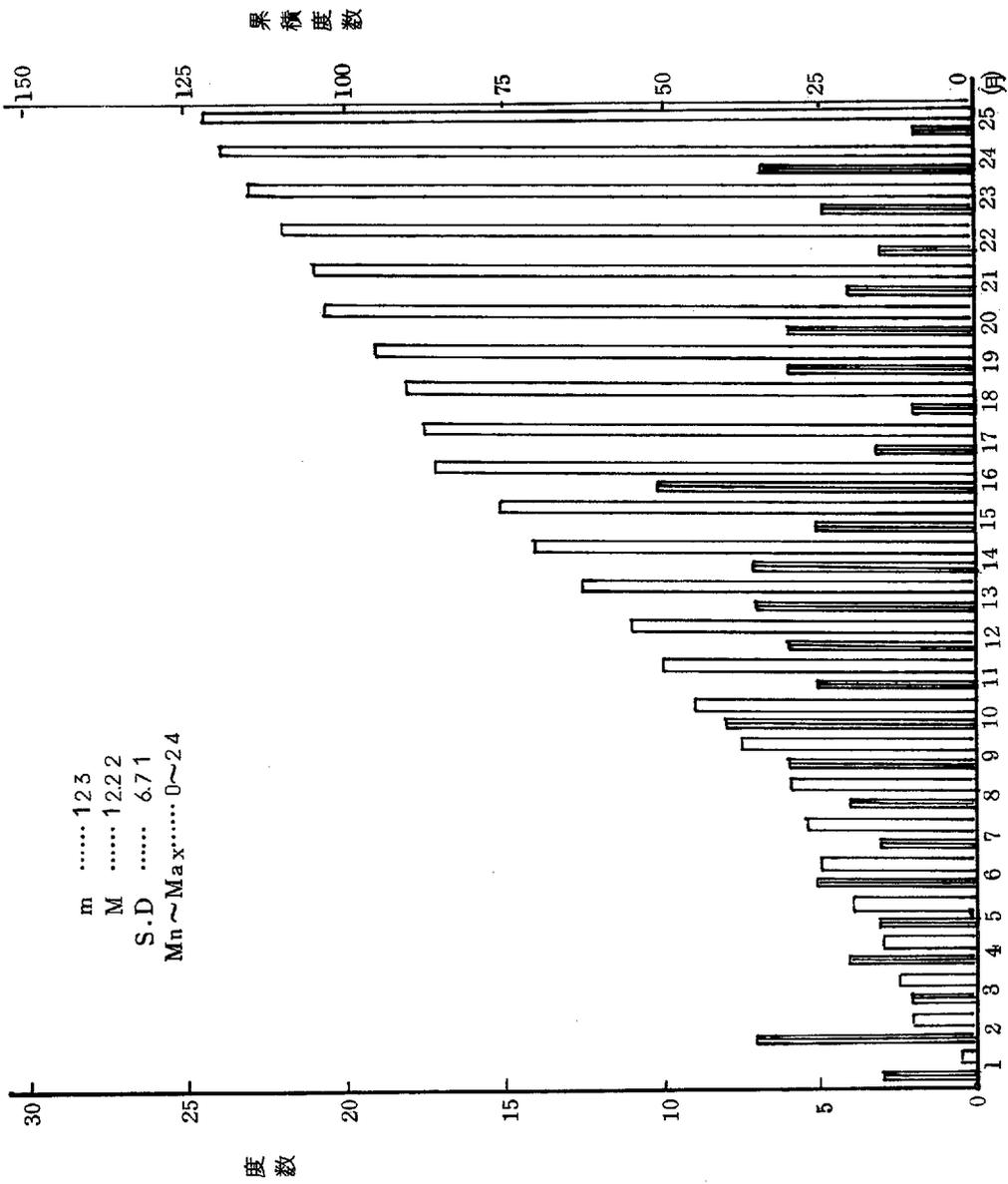
おける deprivation が、言語・理解のみならず他のすべての領域の発達に影響を与えていることが示唆される。

⑥ DQ値を在院期間別、領域別にみると、第5表、第6-1表及び第6-2表のとおりである。とくに乳児院における環境刺激とその発達への影響をみる場合には、入院月齢と在院期間の関係が重要であり、これを第4図に示した。これからわかることは、DQ値の比較的低かった入院月齢0～5カ月児及び18カ月以上児の在院期間が短いことである。またDQ値が比較的高い乳幼児の在院期間は長く、それはいずれの領域のDQ値にもあてはまる。さらに興味深いことは、在院期間が短い場合にみられた領域別の発達上の差や相関が、9カ月以上になるとなくなり、最も相違のある運動機能と言語・理解の間にもその傾向がみられた。在院期間が長くなる程発達全体への影響がみられるといえよう。

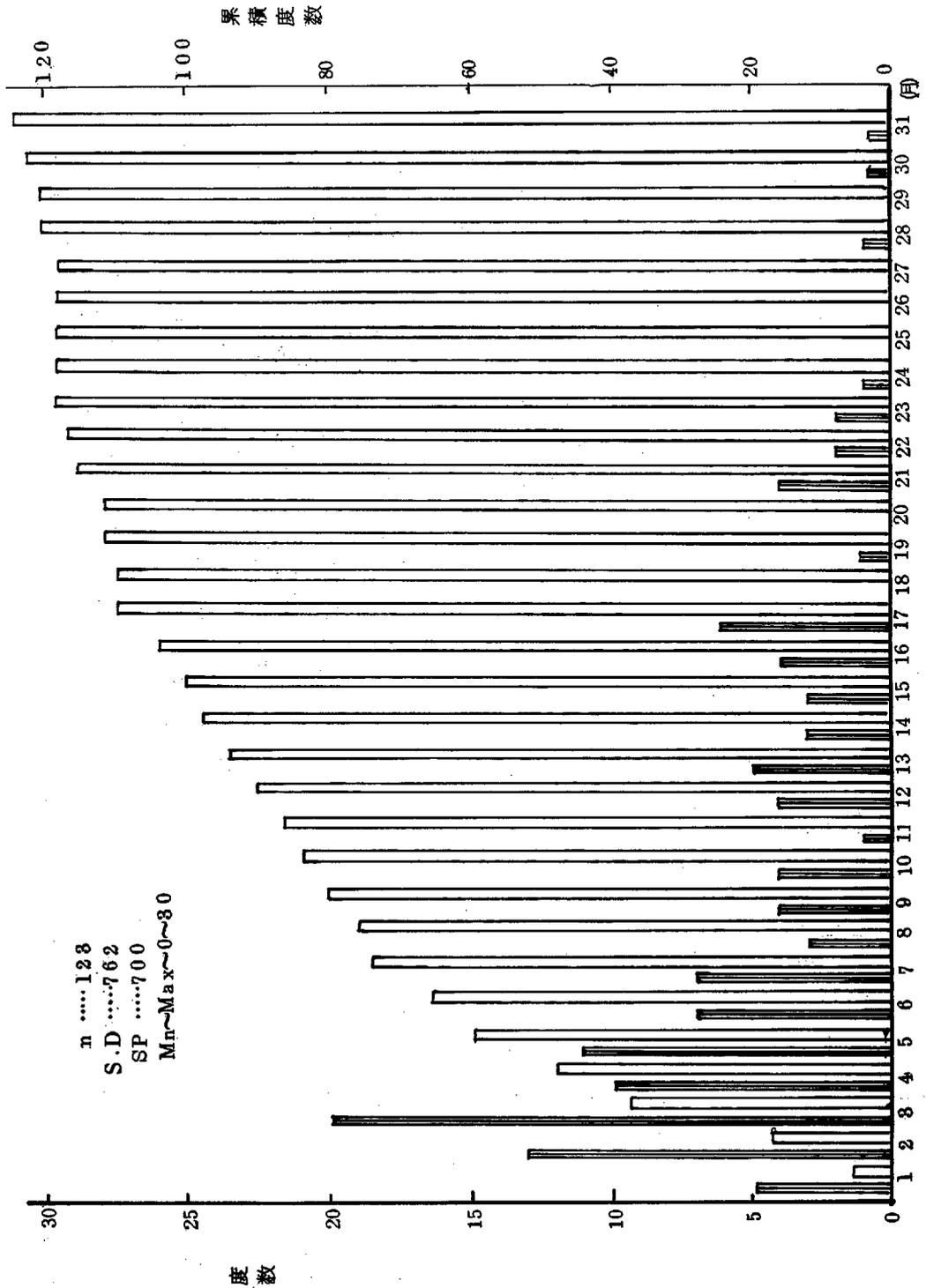
(3) 考 察

以上のことから、とくに下記の点が重要であると考えられる。

- ① 先きの文献研究でも明らかにされた Separation よりも deprivation が、発達にとってより重要な要因であるという指摘は考慮に値する。
- ② 今回対象とした乳児院における養育は在院期間が長くなる程、deprivation というマイナス因子を多く含んでいると考えられるが、言語・理解の領域について今後さらに発達を促進させる環境について検討する必要がある。
- ③ 今後さらに諸条件の異なる乳児院及び家庭養育児を比較対象としてこれらの点を検討していきたい。



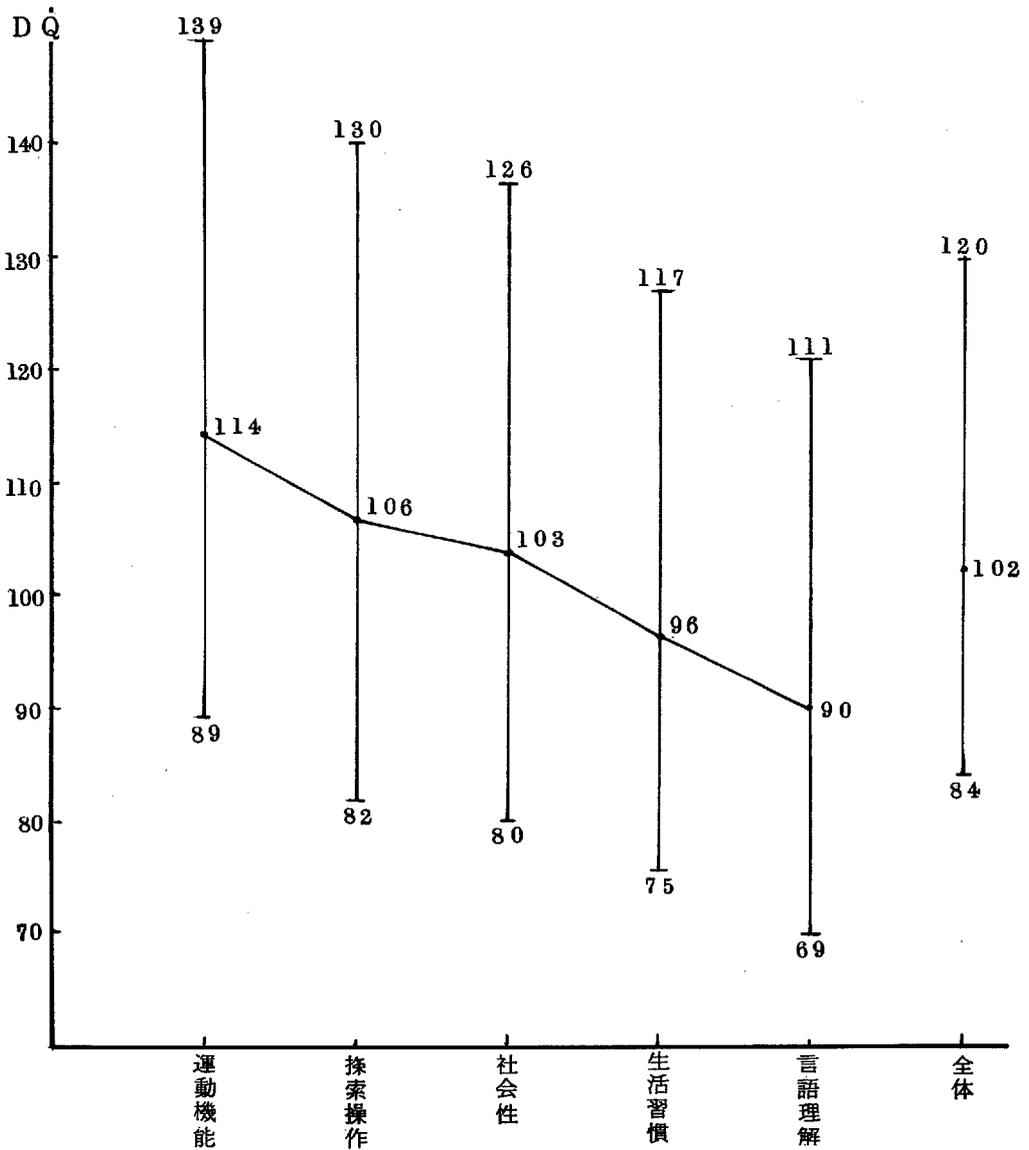
第1図 入院時月齢のヒストグラム



第2図 在院期間のヒストグラム

第1表 性別DQ値

	n	M	S.D.	Max~Min
m	81	101	18	148~41
f	42	102	17	150~78
t	123	102	18	150~41



第3図 領域別DQ・プロフィール (M±1SD)

第2表 DQ値 年度推移

	n	M	S.D	Max ~ Min
47.48年度	27	104	18	150 ~ 77
49.50年度	46	101	20	148 ~ 41
51.52年度	32	100	15	133 ~ 78
33.54年度	18	106	15	125 ~ 60
全体	123	102	18	150 ~ 41

第3表 月齢別DQ平均値とその差の検定値(t値)

	n	M	S.D	0~5	6~11	12~17	18カ月児
0~ ^{九月児} 5	24	100	20	/	*		
6~11	33	109	16				
12~17	33	104	15				**
18~	33	94	18				

*5%水準で有意

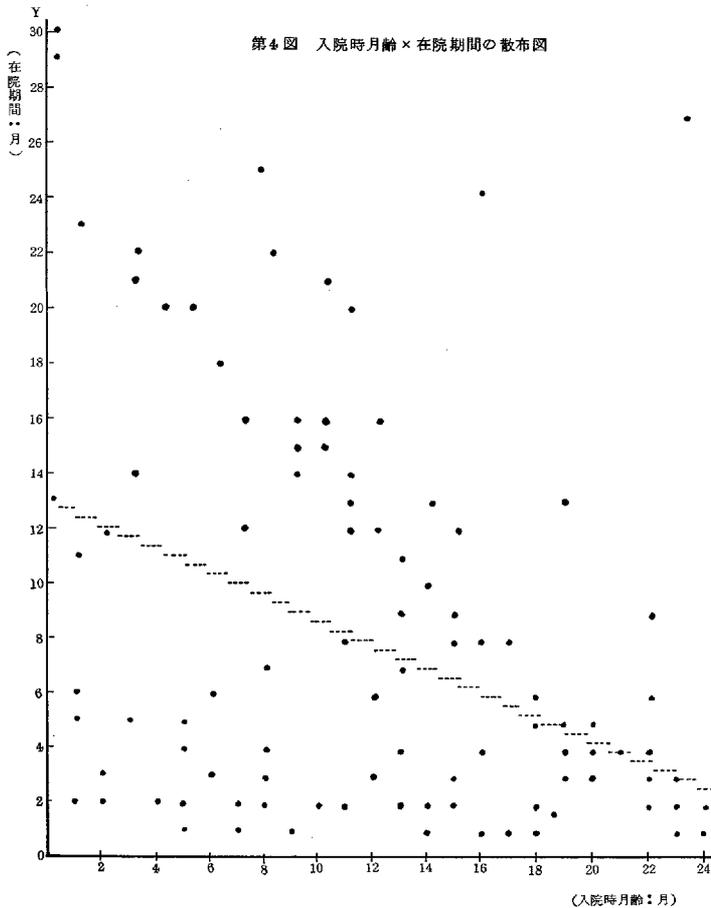
**2.5%水準で有意

第5表 在院期間別DQ平均値とその差の検定値(t値)

	n	M	S.D	0~2	3~5	6~8	9~11	12~17	18ヵ月
0~2	39	91	15	△	2.12 **	4.01 **	1.28	5.71 **	4.16 **
3~5	27	100	16			2.05 **	0.16	3.22 **	2.16 **
6~8	14	111	17				1.73	0.59	0.03
9~11	9	99	16					2.68 **	1.96
12~17	21	114	13						4.60
18~	13	111	13						

*.....5%水準で有意

**.....2.5%水準で有意



第6-1表 在院期間別・領域別DQ値と平均値の差の検定(t値)

		n	M	S.D	0~5	6~11	12~カ月
運動機能	0~5	66	106	25	/	1.29	4.02 **
	6~11	23	114	23		2.10 **	
	12~	34	127	22			
探索操作		n	M	S.D	0~5	6~11	12~カ月
	0~5	66	96	23	/	3.02 **	5.29 **
	6~11	23	114	27		1.00	
	12~	34	120	16			
社会性情緒		n	M	S.D	0~5	6~11	12~カ月
	0~5	66	97	23	/	2.12 **	2.22 **
	6~11	23	110	25		0.38	
	12~	34	108	17			
生活習慣		n	M	S.D	0~5	6~11	12~カ月
	0~5	66	90	19	/	2.29 **	4.41 **
	6~11	23	101	22		1.19	
	12~	34	108	18			
言語理解		n	M	S.D	0~5	6~11	12~カ月
	0~5	66	83	22	/	1.94 *	3.53 **
	6~11	23	93	16		1.23	
	12~	34	99	16			

※ 5%水準で有意

※※ 2.5%水準で有意

第4表 入院月齢別・DQ値の平均値の差の検定と相関値

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)					
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体
0 5 カ 月 n 24	運 動 機 能	107 83	29. 40		0.96	0.40	1.28	1.90	1.02		0.49	0.67 ※※	0.24	0.47 ※※	0.81 ※※
	探 索 操 作	100. 12	25. 86			0.52	0.21	1.08	0.04			0.50 ※※	0.51 ※※	0.37 ※※	0.76 ※※
	社会性 情 緒	104. 37	30. 20				0.78	1.49	0.53				0.23	0.21	0.73 ※※
	生 活 習 慣	98. 70	18. 79					1.01	0.30					0.60 ※※	0.65 ※※
	言 語 理 解	91. 12	31. 31						1.22						0.72 ※※
	全 体	100. 41	20. 06												

※※…… 2.5%水準で有意

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)					
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体
6 11 カ 月 n 33	運 動 機 能	119. 87	20. 01		1.64	1.23	1.52	1.76	1.26		0.61 ※※	0.28	0.50 ※※	0.58 ※※	0.70 ※※
	探 索 操 作	109. 18	25. 64			1.33	1.07	2.89 ※※	2.08 ※※			0.41 ※※	0.61 ※※	0.65 ※※	0.83 ※※
	社会性 情 緒	110. 36	22. 22				1.23	2.17 ※※	1.56				0.21	0.44 ※※	0.50 ※※
	生 活 習 慣	97. 54	24. 67					2.67 ※※	1.92					0.46 ※※	0.70 ※※
	言 語 理 解	94. 51	15. 07						1.38						0.81 ※※
	全 体	107. 27	17. 76												

※※…… 2.5%水準で有意

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)					
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体
12 カ 月 n 33	運 動 機 能	115. 48	21. 53		0.74	1.54	2.98	5.25	2.07		0.70	0.35	0.60	0.57	0.81
	探 索 操 作	111. 36	23 37			0.63	2.03	4.11	1.09			0.39	0.47	0.58	0.83
	社会性 情 緒	108. 24	16. 21				1.73	4.36	0.56				-0.08	0.35	0.54
	生 活 習 慣	100. 96	17. 75					2.35	1.29					0.42	0.63
	言 語 理 解	91. 42	15. 09						4.04						0.77
	全 体	106. 12	14. 12												

※※…… 2.5%水準で有意

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)					
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体
18 カ 月 以 上 n 33	運 動 機 能	110. 15	29. 89		1.52	3.61	2.55	4.18	2.43		0.53	0.49	0.46	0.48	0.77
	探 索 操 作	100. 30	21. 97			2.44	1.23	3.17	1.00			0.65	0.66	0.59	0.84
	社会性 情 緒	88. 33	17. 56				1.08	1.02	1.58				0.58	0.69	0.81
	生 活 習 慣	93. 63	22. 04					1.91	0.33					0.61	0.81
	言 語 理 解	83. 42	21. 25						2.43						0.82
	全 体	95. 30	18. 25												

※※…… 2.5%水準で有意

第 6 - 2 在院期間別・領域別 D Q 値の平均値の差の検定と相関値

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)					
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体
0	運動機能	100.	25.		2.39	1.13	2.29	3.92	1.80		0.44	0.32	0.21	0.43	0.60
		94	32		※※		※※	※※			※※		※※	※※	※※
2	探索操作	88.	19.			1.32	0.13	1.95	0.85			0.50	0.42	0.46	0.75
		45	06								※※	※※	※※	※※	※※
カ	社会性情緒	94.	21.				1.20	3.05	0.61				0.10	0.25	0.57
		75	59					※※							※※
月	生活習慣	89.	18.					2.08	0.71					0.45	0.46
		05	88					※※						※※	※※
n	言語理解	78.	23.						2.82						0.71
		83	13						※※						※※
37	全体	92.	16.												
		00	38												

※※…… 2.5 % 水準で有意

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)					
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体
3	運動機能	114.	23.		1.77	1.94	3.64	4.16	2.86		0.59	0.52	0.39	0.34	0.76
		93	40				※※	※※	※※		※※	※※	※※		※※
5	探索操作	104.	22.			0.28	1.80	2.34	0.86			0.53	0.52	0.36	0.75
		17	70					※※			※※	※※		※※	※※
カ	社会性情緒	102.	25.				1.38	1.87	0.47				0.21	0.51	0.74
		34	79											※※	※※
月	生活習慣	93.	20.					0.56	1.16					0.55	0.65
		89	50											※※	※※
n	言語理解	90.	20.						1.78						0.69
		86	47												※※
29	全体	99.	16.												
		62	70												

※※…… 2.5 % 水準で有意

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)						
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体	
6 8 カ 月 n 13	運 動 機 能	118. 53	19. 70		0.00	0.64	1.67	2.87	0.93			0.39	0.43	0.35	0.68	0.74
	探 索 操 作	118. 53	30. 19			0.50	1.36	2.24	0.70			0.09	0.47	0.55	0.70	
	社会性 情 緒	123. 76	21. 37				2.19	3.39	1.56				0.39	0.63	0.64	
	生 活 習 慣	103. 53	25. 46					0.86	0.93					0.53	0.76	
	言 語 理 解	95. 69	20. 74						2.08						0.88	
	全 体	111. 61	18. 00													

※※……2.5%水準で有意

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)						
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体	
9 11 カ 月 n 9	運 動 機 能	106. 77	27. 22		0.00	1.18	0.98	1.55	0.73			0.77	0.67	0.92	0.38	0.93
	探 索 操 作	106. 77	24. 32			1.26	1.06	1.71	0.79			0.72	0.86	0.51	0.93	
	社会性 情 緒	93. 55	19. 62				0.30	0.20	0.63				0.62	0.01	0.79	
	生 活 習 慣	96. 22	17. 19					0.64	0.34					0.47	0.95	
	言 語 理 解	92. 11	8. 03						1.11						0.46	
	全 体	99. 00	16. 72													

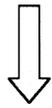
※※……2.5%水準で有意

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)						
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体	
12 17 n 21	運動機能	127. 47	20. 11		1.70	1.32	1.14	2.16	2.09		0.74 **	0.09	0.55 **	0.14	0.62 **	
	探索操作	120. 66	15. 39			1.28	1.95	1.26	1.22			0.19	0.34	0.30	0.64 **	
	社会性情緒	110. 33	17. 44				1.52	1.62	1.57				0.03	0.12	0.24	
	生活習慣	109. 38	21. 50					2.47	2.39					0.31	0.53 **	
	言語理解	97. 71	13. 68						1.03						0.62 **	
	全体	114. 80	13. 89													

**..... 2.5 %水準で有意

	領域	M	S.D	平均値の差の検定 (t 値)						相 関 (R)						
				運動	探索	社会性	生活	言語	全体	運動	探索	社会性	生活	言語	全体	
18 カ 月 以 上 n 14	運動機能	116. 64	32. 53		0.43	1.41	1.12	1.53	0.64		0.46	0.38	0.21	0.34	0.45	
	探索操作	111. 78	26. 95			1.05	0.71	1.20	0.15			0.34	0.61 **	0.23	0.46	
	社会性情緒	102. 71	17. 49				0.53	0.26	1.29				0.21	0.77 **	0.87 **	
	生活習慣	105. 92	14. 43					0.76	0.84					0.29	0.52	
	言語理解	100. 78	20. 77						1.44						0.86 **	
	全体	110. 50	14. 25													

**..... 2.5 %水準で有意



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1.はじめに

乳幼児の発達環境が、その後の精神身体発育にさまざまな影響を及ぼすとの指摘がある。とくに乳幼児期の分離(Separation)及び喪失(Deprivation)の経験を無視することはできない。これについては、前年度において欧米の文献を中心に検討し、論考したところである。本研究は、その文献研究に引き続き計画された実証的研究の一部である。